ブランジア人魔戦記

長村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブランジア人魔戦記

【Ｎコード】
Ｎ８６１７Ｚ

【作者名】
長村

【あらすじ】
ここことは異なる世界の、とある地方にあるブランジア王国。
これは、人間と魔族の戦いの物語――。

記憶喪失の少年、ショーマはあらゆる魔法を瞬時に覚えてしまう『能力』持っていた。望まない力を正しく制御出来るようにと望んだ彼は騎士士官学校において魔法を学ぶこととなった。
そこで出会う、誇り高き少女メリル。勇気ある少年レウス。そして、多くの仲間達。

彼らとの出会いにより、ショーマの心に目覚める想いがあった。
出会い、夢を語り、ともに戦い、別れ、そしてまた出会う。
その果てに、何を見ると言うのか――。

始まりの1日　（1）

鳳凰歴３０６年。３０年に渡る西と東に並ぶブランジア王国とイーグリス王国の長い戦いは、イーグリス王国王都ロドニスへの奇襲作戦の成功により、ブランジア王国の勝利に終わった。

それから3年。復興の続くブランジア王国ではある問題が発生していた。戦争末期より急増し始めた『魔族』の脅威である。精鋭揃いとはいえ、長い戦で消耗し、治安維持活動にも戦力を割いていた騎士団ではこれに対応しきれずにいた。

そこで、３００年以上の歴史上において、多くの騎士を輩出した名門リヨール士官学校を一般にも開放し、若い力を広く育てることで、急ぎ騎士団の戦力を増加させることとなった……。

人魔戦争と呼ばれる新たな戦いの前哨である。

※　※　※

ショーマ・ウォーズカは記憶喪失であった。

黒い髪に、見慣れぬ格好、高級そうな眼鏡をしたその不思議な少年は、山の中で倒れていたところを老人オードランに助けられ、少しずつでも自分の記憶を取り戻そうと、彼とその妻の三人で静かに暮らしていた。

しかし彼には、とても静かには暮らせないであろう能力があった。

魔法の『瞬間修得』である。

魔導師を志す者が最初に覚えるのに相応しいとされる初級魔法、『アイスショット』ですら、修得に2週間はかかるのが普通であるところを、彼は教本を一読しただけで修めたという。

初級魔法を容易く修得する……。それは才能ある者にはままある

ことではあったが、彼の能力はそうではない。高位魔法の『サンダーストーム』も同様に一読で修得したというのだ。2度ならば偶然で済ませたところであったが、後の検証により彼はさらに3度、計5つの魔法を同じように瞬時に修得したという。

記憶を失う前の彼は大魔導師であり、『修得した』のではなく『思い出した』のか。とも予想されたが、彼はまだ20にも満たない若者である。それは無いだろう。やはり、本当に彼だけの『特異さ』なのか。判断の難しいところであった。

いずれにせよ『経験の伴わない力』は彼自身をも危険にさらしかねない。そう判断したオードランは、ショーマ・ウォーズカの正体を保留とし、彼を正しく魔法の修練ができる騎士学舎へと預けることを決めたのだった。

※

「とは言うけどね……」

当のショーマは正直途方に暮れていた。

穏やかに日常生活を送る程度には問題の無かったショーマの記憶喪失ではあったが、都会に出て集団生活を送るともなれば、さすがに面倒も多いに決まっているだろう。

まずは記憶を取り戻してから――、と行きたいのだったが、恩人であるオードランのお爺さんの言うことも否定しにくい。自分の記憶を取り戻すことは確かに大事だが、他人に迷惑をかける危険性を孕んだままでいることが良いことなわけが無いのだ。

――急いては事を仕損じる。何もわからないなら、まずは今ある自分を固めてからだ。

オードランのお爺さんの経験則らしい。

「うん、そうだな。……頑張ろう」

厳かな石造りの門。リヨール士官学校を前にしてショーマは1人、決意を固めていると、

「ああ、頑張ろう！」
「うわっ」
いつの間にか隣に立っていた同世代くらいの少年に同意された。
緩やかに波打つ金髪と、育ちの良さを感じさせる柔らかな笑みが印象的な少年だった。もちろん、今の記憶には無い人物である。
「ええっと……」
たじろいでいると、金髪の少年は自分から語り始めた。
「僕はレウス。レウス・ブロウブ。君がショーマ・ウォーズカ君だよね。兄から話は聞いているよ」
レウスと名乗った少年は気さくそうに微笑んだ。

ショーマもブロウブという姓には覚えがあった。オードランと暮らしていた小さな山村であるリウルの村から、ショーマをこの学術都市リヨールまで連れてきてくれた上、士官学校の入学や生活する寮の手配までしてくれた人物だ。手際良く物事を進めていく様子は、少し見るだけでも彼の優秀さを感じさせた。
なんでも騎士として歴史のある結構な名門の家系だとか。

「あ、ああ。その節は本当にどうもありがとう。こっちも色々と大変でさ。本当、助かったよ」
「どういたしまして。……申し訳無いが、兄はあれで結構忙しい人なんだ。だから学校では、代わりに僕が君の助けになろうと思う。ちょうど同じ時期に入学する事が決まっていたし。構わないかな？」
裏の無い笑顔にショーマは安心感を覚える。今の彼にとって、当てにして良い人物がいるというのは、それだけで随分と心を落ち着かせてくれるものだった。
「ああ。ありがたい話だよ。迷惑をかけると思うけど、どうぞよろしく頼む」
そっと手を差し出すショーマ。レウス気の良い笑顔ではそれをぎゅっと握り返した。

※

入学式は式というほど大袈裟なものではなく、学長による挨拶程度で終わってしまった。そんなことに時間を割くなら、生徒達は1秒でも多く教練に励めということである。

「……その髪はこの国の生まれでは無いよね。やっぱり外国から何かの用事でやって来たけれど、不幸な事故か何かで……。ってところかなあ。やっぱり」

ショーマ達新入生は最初の授業が始まるまで教室で待機中である。退屈をもて余す学生達は、新しい友人達と交流を深めるため談笑中だ。

そんな中ショーマは、人の少ない一番端の席について、レウスと自身のことについて相談していた。

「でも隣国のイーグリスにもそんな髪の人はいないし、もっと遠くからかな？」

ここブランジア王国や東に隣接するイーグリス王国の民は金髪や茶髪がほぼ全てである。ショーマのような黒髪はまずいない。よってレウスは彼をイーグリスより、さらに東方からの出身ではないかと予想した。ブランジアの西はかなり広い海しか無いので、海を越えてきたという可能性は低い。ゼロでは無いが。

「でも敗戦の影響でまだまだ治安の安定しないイーグリスの国境を1人で越えられるとは思えない。もしそうなら仲間がいるんだろうけど、捜してくれている様子も無い。君のような目立つ人を捜しているなら噂も聞くはずだがそれも無い。その眼鏡はそこそこ高級な物のように見えるし、それなりの身分であるならなおさらだ。」

この国の地理に関する記憶も無いショーマにとって、次々と情報を挙げてくれるレウスは心強い。出てくる結果は空しいものばかりだったが。

「うん。……本当、何なんだろうね。俺は」

真剣に考えてくれているレウスに、ショーマは嬉しさと共に申し訳無さも感じてしまう。
「あまり急がなくても良いよ。今はまず魔法の勉強からしてみたいしさ」
「そうか、うん。わかった。そう簡単に結論は出ないか」

話が一区切りしたので、２人は軽く教室の様子を見渡す。
１２０名の新入生は３つの教室に分けられ、今は４０名の生徒達がこの教室に詰め寄っている。
「本来は貴族や騎士の家系か、その推薦を受けた人しか入学できなかったんだけどね。魔物の増大に対してその考えは改められたみたいだよ。平民からもたくさんの志願者がいて、例年に比べると倍以上の新入生らしい」
「へえ……」
と、言われても貴族や騎士、平民の違いなどショーマにはよくわからない。これがどれくらい多いのかというのもぴんとこなかった。
「でもやっぱり名のある騎士の生まれも多いみたいだね」
「……俺にはわかんないよ」
「はは、そうだね。例えば、あそこにいるのはガランマ家の次男だし、あっちで人だかりが出来ているのはララニー家の三男。それから、目の前の席にいるのがドラニクス家のご令嬢。だよね？」
話の流れとはいえ、突然前の席にいた金髪の少女に身を乗り出して話しかけるレウスにショーマは少し驚く。気さくだとは思っていたが。
声をかけられた少女はゆっくりとこちらに振り向いた。
「……こんにちわ」
美しく気品のある金髪と、宝石のようにきらめく碧眼、決め細やかな肌とで整った顔立ちの、いかにもな美少女であったが、笑顔のレウスとは対称的な、機嫌の悪そうな仏頂面がそれを減じていた。
「……なにか嫌なことでもあったのかな」

「貴方に話しかけられたせいかしらね」
「ひどいなあ」
２人は軽口を交わしあう。どうやら顔見知りであるらしい。ショーマが置いてきぼりにされた気分でいると、レウスはすぐに彼女を紹介してくれた。
「ああ、こちらメリル・ドラニクス嬢。彼女の家と僕のブロウブ家は昔から家族ぐるみで付き合いがあってね。なんだか僕は彼女に嫌われているようだけども」
確かに愛想が良いと言えば良いのだが、裏を返せば馴れ馴れしいとも言える。それがレウスという少年だった。ショーマにはそれがありがたいのだが。
「メリル、彼はショーマ・ウォーズカ君。僕の友人だ」
「あ、どうも。よろしく」
どんどん話を進めてしまうレウスに戸惑いつつも、ショーマはメリルに頭を下げる。
「……こちらこそ、よろしく」
メリルは短いながらも確かに笑みを返した。明らかに態度が違う対応だが、レウスは特に気にしていないようだった。

※

ざわつく教室の扉を開き、恰幅の良い初老の男性が入ってくる。手にはいくつかの資料を持っている。彼が指導教員のようだ。
「はい静かに。……えーどうも。指導教員のボンボーラです。少々遅刻してしまいましたが、数分程度。まあ気にせずいきましょう」
１秒でも多く教練に励めと言われた覚えがあったが、ショーマは気にしないでおいた。
「えー早速。諸君らの今後ですが。えー学生諸君はまず目標とする『クラス』を決めてもらいまして、それを目指して、各授業を選択して参加し能力を身に付けていき、最後には是非とも立派な騎士に

なって頂きます」
『クラス』というのは騎士達に与えられる戦闘スタイルに基づいた称号だ。それくらいはショーマも事前に勉強している。
「えーまず、授業には実技講習と筆記講習があり、実技は選択式ですが、筆記は必修ですので、サボったり遅刻など無いよう。こちらでは騎士としての心構えや教養、戦闘行動に際しての戦術や戦略など『クラス』に依らない内容を学びます。
えーそれで肝心なのは実技講習についてです。武術系４科目、魔法系４科目の計８科目から自由に選択して、戦闘訓練を受けてもらいます。
武術系４科目の内訳は『剣術』、『槍術』、『拳術』、『弓術』。魔法系４科目の内訳は『黒魔法』、『白魔法』、『竜操術』、『薬師術』となります。えー内容はだいたい説明するまでも無いでしょうが……」
説明するまでも無いと言われても困る人物は１人いた。
「なあ、武術系４つと白黒魔法はわかるけど竜操術と薬師術って？」
ショーマは小声で隣席のレウスに尋ねる。
武術系は剣、槍、拳、弓。それらを扱う武術を学ぶ、というのはすぐわかる。白魔法と黒魔法もわかる。それを容易く修得してしまったから彼はここにいるのだから。
しかし竜操術と薬師術は、知らないか覚えていない。字面通りの意味で良いのだろうか。竜を操る？
「竜操術は端的に言えば特殊な魔法技術だね。基本は同じだけど竜族の力を借りてさらに高位の魔法が使えるんだけど、結構難しくてあまり使う人もいないから、僕も詳しくはわからないよ。メリルが詳しいから後で聞いてみると良い」
前の席に座るメリルに目を向ける。彼女はそ知らぬ振りでじっとボンボーラ教員の話に耳を傾けている。
（難しい高位魔法ね……。結構すごい子だったのか）
「薬師術は薬草の調合を行う『クラス』だけど普通の薬剤師とは違

い、魔法の力を織り混ぜるんだ。普通の魔法と違って薬の力にも頼るから準備に手間がかかるけど、そのぶん利便性に優れる技術だね。魔法の心得はあるけど、それだけで戦うには心許ない人向けかな」
「なるほど。ありがとう」
ボンボーラ教員の話に意識を戻す。
「えーどれか1科目を全て修めることで卒業が可能となりますが、実際騎士の称号を得ようとするならば、えー1科目だけでは難しいところですので、別にもう1科目の半分だけでも修める事を薦めます。理想は2科目ですが、……えー少々覚悟がいると思われますね。それ以上は体を壊しかねないのでお薦めはしません。若者は無鉄砲が取り柄と言いますが、無理はしないよう」
3科目は相当きつい、と。2科目でもちょっと大変だそうだが、自分の能力を活かせば白魔法と黒魔法での2科目なら比較的簡単かもしれない。それで満足しておこう。そもそも騎士になりに来たわけでは無いのだし。
とショーマが思っていると、学生達の中から1人が声をあげた。
「先生！　しかしいずれ将軍クラスまで目指すのであれば、3科目以上は目指すべきだと思いますが！」
濃い色の肌をした、気の強そうな男子生徒だった。挑むような目付きでボンボーラ教員を睨み付けている。
「……無理はしないようにと言いました。志を高く持つのは良いですが、ここでの教練だけが君の騎士としての全てになるわけでは無いのですよ」
「それでも早いに越した事は無いでしょう！」
……これは食い下がらない。そう素早く判断したのかボンボーラ教員の方が先に折れた。
「出来ると思うのなら、精々頑張りなさい。
……えー、それでは。授業の選択は自由ですがおおよその参加人数は把握しておく必要があるので、こちらの用紙に名前と希望科目を書いて本日中に提出してください。期限は短いですが戦場でのん

びり悩んでいる暇は無いとでも思って、さくっと決めてください。えーそれでは本日は解散とします……。この後は興味のある科目の様子を見学する時間に当ててください」

※

ボンボーラ教員が退室すると、教室はまたにわかにざわつき始めた。

「さっきの彼、すごい剣幕だったな」

「うん？　ああ、そうだね。まあそういう人もいるよ。将軍クラスともなれば地位も名誉も得られる富も相当なものだからね」

「地位に名誉ね……」

「それよりショーマ、君はどの科目を受けるんだい？　やはり白魔法と黒魔法かな」

何か話をそらされた気がするが……気のせいだろうと判断した。

「ああ。ひとまずはね。レウスは？」

「僕はその2つと剣術かな」

レウスはしれっと3つの科目を挙げた。

「……大変なんだろ？　あ、まさか」

「気にしないで良いよ。ちゃんと入学する前からその3つを選ぶつもりだったからね。

……名門ブロウブ家の一員である以上、末の弟とはいえそれは当然のように望まれることだし、成し遂げる覚悟もあるよ」

それは先程の男子生徒とはまた違う強い意思を感じさせる物言いだった。

「……かっこいいなあお前」

「そうかい？　照れるな」

そう言ってレウスは本当に照れ臭そうに笑った。

正直な男である。

「あ、メリルはどうするんだい？　竜操術以外にも受けるの？」

照れ隠しか、レウスは前の席にいるメリルにも話を振った。
「……はぁ」
「どうしたのさ」
「私も黒、受けるのよ」
ため息をつきながらメリルは答えた。
「へえ。それじゃあ3人一緒だね」
「そーね」
嬉しそうなレウスと、そして対称的にダウナーなメリルであった。
ひょっとしてこれが定番の調子になるのだろうか。そんなことをショーマは思った。

始まりの1日　（2）

レウス・ブロウブは騎士の名門、ブロウブ家の三男として生を受けた。騎士と、騎士を志す者からは、その名だけで期待と信頼と羨望が集まることを宿命付けられたレウスは、しかし真っ直ぐな心を持ちながら育ち、他者の助けとなれるよう自らを鍛えることを惜しまなかった。

そんな彼はやがて、人魔戦争においてその名を広く知られることとなる――。

※　※　※

ショーマ、レウス、メリルの3人は揃って8つの科目を順番に見学して回ることにした。

自分の受ける予定の無い科目も見ておいた方が良い、というのはレウスの談である。

ざっと見てきたところ、武術系4科目は体力向上のための基礎鍛練や、各武具を用いた技能訓練など、傍目にも分かりやすいものだったので軽く済ませて終えた。

現在は白魔法科の行われる教室に向かっているところである。

「あ、そうだメリルさん」

「なに？」

「突然こんなこと言うのもなんだけど、俺、実は記憶喪失なんだ」

「本当に突然ね」

「悪いね。そのせいで……その、非常識なことをしたり、時々変なことを言うかもしれないけど、そういうこと承知しておいてほしい」

さらっと言ってはみたが、ショーマとしては、実は少々勇気のいる告白だった。

「まあ、色々込み入った事情がありそうなのは察していたけど……」

メリルの視線はショーマの黒い髪に向かっていた。この国では見ないであろうそれは、彼女にとっても気になるところであった。馴染みの無い風貌に聞き覚えの無い家名。レウスが目をかけていたのにもただのお人好しでは無いと察してはいた。
「記憶喪失ね……。どんなことが思い出せないの？」
「名前は思い出せたけど、１ヶ月ほど前、リウルの村で目が覚めた時より以前の記憶がさっぱりとね」
「さっぱり？」
「うん。どこで誰とどんな暮らしをしていたのか。全然だめだ」
「それはまた……重症ね」
「あとはまあ、日常生活はわりと問題無いんだけど、魔法とかは……」
「そう……」
「これから魔法科の見学だけど、変なことしたり、言ったりするかもしれないけど、驚かないでおくれよ」
「うん。それは良いけど……。ていうか記憶喪失のまま騎士志望なの？　貴方」
「ああ、いやそれはそれでまた色々あって」
「もう着いちゃったよ、ショーマ」
結局話の終わらない内に白魔法科の教室に到着してしまった。
「ああ、えっと続きは、後で」
我ながら簡単に説明できない事情を抱えているものだと、ショーマは改めてそう実感した。

※

白魔法科の教室に入ると、担当教員と思われる女性から声をかけられた。
「あら、貴方、ひょっとして例の……？」
女性教員はショーマの黒髪を見て判断したらしい。学校へは彼の

能力はすでに連絡が行っているのだ。
「はい。彼がショーマ・ウォーズカです。もう話は聞いて頂けていますか」
「ええ、はい……、あ、では貴方がブロウブ家の？」
「はい。レウスです。よろしくお願いします」
「わかりました。あ、私白魔法科教員のエルメーラと言います。……皆さんもう他の魔法科には行きました？」
「いえ、3人ともここが最初です」
てきぱきとエルメーラ教員との会話を進めるレウス。その後ろではメリルが何やら言いたげな視線をショーマへと向けていた。
特別な事情……一般生徒には特に縁の無さそうな。そういうものを先程の会話から推測させられただろう。
「ではこちらに。魔法科ではまず最初に魔導力の測定を行いますので……」
「……」
「……」
ショーマとメリルは無言のままエルメーラ教員の後へ続いた。

3人の前に置かれたのは無色透明な水晶玉だった。
「この水晶に手を置くと、魔導力の属性と強さが現れます。あんまりに反応が微弱だと、魔法科を受けるのはお薦めできないかなってなっちゃうんですけどね」
エルメーラ教員が説明する。ショーマには魔導力という言葉に覚えが無かったが、字面から予想くらいはついた。
「まあそんな心配は滅多に無いでしょうけど。……どなたからやります？」
「じゃあ僕から」
特に相談もなくレウスが一番手を宣言し、水晶に手を乗せた。
すると、無色透明なはずの水晶の中に、どこからともなく黄緑色の煙のようなものが漂い始めた。煙は水晶の中をふわふわと漂って

いる。
　これが魔導力の属性と強さというやつであろうか。ショーマにはこれがどういう結果なのかも、どういう仕組みでこうなるのかもさっぱりわからなかった。
「はい、もう良いですよー。次の方は？」
　エルメーラ教員は結果をメモしながら次の人物を催促した。
「ショーマ、やってみなよ」
「え、俺？」
「手を置くだけだよ。難しいことは無いだろ？」
「あ、ああ……」
　レウスが水晶から手を離すと、黄緑色の煙も消えた。それを見てショーマもそっと水晶に手を乗せる。
　現れたのは黒い煙だった。
「うわ」
　特に何か力を込めたわけでもなく、本当に手を置いただけで煙が現れた。
　しかしどこかおどろおどろしさを感じる真っ黒な煙には、少し背筋が寒くなる。
「おお」
「あ、すごいですねえ。全属性ですか」
　レウスと女性教員は揃って感心しているようだった。
「全属性？」
「あ、勢いもすごいですねえ」
「え」
　黒い煙はレウスの黄緑色の煙と違い、強めの勢いで水晶の中をぐるぐると漂っている。
　何が何やらわからないでいると、レウスが解説を始めた。
「これは色が属性、煙の漂う勢いが強さを表しているんだ。全ての色が混ざっている黒はつまり全ての属性を表す。勢いも強いし魔導力の強さも相当な物のようだね」

「要するに……？」

「君にはすごい魔法の素質があるってことさ」

――今更と言えば今更な事実ではあった。

瞬時に魔法を修得する能力。それはもちろん覚えた魔法を行使出来るということでもある。実際に強大な魔法を放ってしまったこともある。

……これが魔法の素質がある、と言わなければ何だと言うのか。

だから別段驚くことではない。ショーマ自身と、その事情を知る者にとっては。

「ふーん……」

そうで無い者が1人。メリルだった。

「ずいぶんとまあ……すごいものを持ってるのね」

その言葉を驚きと苛立ちの混ざったような物言いだと、ショーマは感じた。

「ああ、まあ、ね……。自分でも何でこんなことになってるかわからないし。それと……」

「まだ何かあるの？」

「さっきの話の続きでもあるんだけど……」

※

「にわかには信じがたいわね……」

ショーマは自分の持つ『瞬間修得能力』のことについて、改めて話した。その能力ゆえ、この士官学校への推薦状が得られたことまで。

「学校側でも、彼に関しては色々と配慮するように言われているんです」

エルメーラ教員が補足した。
「魔法を教える分には楽で良いんじゃないか。なんて冗談めかしてる先生もいるんですけどね。フフ」
エルメーラ教員は呑気そうに笑った。
「……でも、良い印象を持たない人もいるんじゃないかしら。特に同じ学生なんかは」
しかしメリルはそれほど楽観的では無かった。
「ああ……」
言われてみれば、そういうことは、確かにあるかもしれない。自分のことばかりで手一杯だったショーマは、そういう考えには至っていなかった。
「記憶喪失はともかく、この事はあまりおおっぴらにしないほうが良いかもね」
「……そんなに隠し通せるものでも無さそうだけど」
「その時はまあ、その時だよ」
「あ、私もそう思いますよ。学校外の人にも、あまり言いふらさない方が良いと思います」
「……そう、ですね」

ショーマが初めて魔法を修得してしまったとき、それがどういう物だったのかもわからずに、その魔法、『サンダーストーム』を不意に発動してしまったことがあった。
オードランの育てている畑の半分ほどを吹き飛ばしてしまい、随分と迷惑をかけてしまった。彼は笑って許してくれたが、ショーマは自分が恐ろしくなった。もしこれが人の多い場所であったら……。
そんな折、ちゃんとした学習のできる士官学校への推薦は、不安もあったが安堵もあった。希望があった。
けれど今、それを疎ましく思う者もいるかもしれない。ということに気付いた。……それは少し、悲しいことに思えた。

「まあ、良いわ。そろそろ私と変わってもらえる？」
「え？」
ぼんやりしていたショーマは、メリルが何の事を言っているのか、一瞬わからなかった。
「水晶」
「あ、そっか。ごめん」
ずっと水晶に手を乗せたまま話を続けていたことにも気づいていなかったようだ。
「まったく」
ショーマが手を離すと、すぐにもメリルは水晶に手を乗せた。さっさと済ませようとばかりに。
メリルの手は細くしなやかで、丁寧に磨かれた爪などさりげないところからも気品のようなものが感じられた。
（綺麗な指だな）
彼女の魔導反応は綺麗な紫色の煙で、勢いはショーマのそれより少しゆっくりめ。といった所だった。それでも結構な勢いがあるようだ。
「赤と青の綺麗な2属性ですね。強さもかなりある」
「彼に比べたらどうってこと無いですよ」
「いやいや、新入生でこれは相当すごいですよ」
エルメーラ教員は素直に感嘆しているようだった。
「彼女はドラニクス家の生まれなんです」
「ああ、そうだったんですか。いやさすがです」
メリルは横からのレウスの評価に澄まし顔であったが、よく見ると笑みを押さえようとしているようにも見える。
「はい、それではこちらが結果の控えです。別の魔法科目を見に行くときはこれを見せてくださいね。もう1回検査しなくても済みますので」
「ありがとうございます」

3人は先程の結果が書かれた紙を受け取ると、次は教室の様子を見学し始めた。
「この教室では魔法の術式や実戦における使用ノウハウなんかを学ぶんです。実際に発動する訓練は別の場所で行われる事が多いですね」
教室といってもボンボーラ教員の話を聞いたあの教室とは趣が異なり、特に目立つのは大量の本と本棚である。
「あ、その辺にあるのは魔法の教本ですから……ウォーズカ君は読んだだけで覚えちゃうんですよね……。あんまり迂闊には開かない方が良いと思います……」
「あ、そ、そうですね。気を付けます……」

※

「ちゃんとした授業は明日からですので。今日はこの辺で」
「ありがとうございました」
見学を済ませ、教室から退室しようとする。
「あ、ショーマ、彼だよ」
レウスがさきほどの水晶玉で魔導力の測定をしている生徒に気が付いた。
「ああ……」
ボンボーラ教員に噛みついていた濃い肌の色をした男子生徒だった。何やら渋い顔をしている。
「おーい」
レウスはさっそく近づいて声をかける。
「……はあ」
またか、とため息をつきながらメリルは彼の様子を目だけで追う。
「君もこれから魔法科の見学かい？　良かったら一緒にどうかな。同じ教室に集まったよしみで」
レウスは気さくに話しかけている。ショーマとメリルはそれを少

し離れた場所から見ているだけだ。
「いつも……あんな調子なの？」
「……そうみたいね」

「僕はレウス・ブロウブ。君は？」
「ブロウブ……？」
男子生徒はその名に思うところがあるのか、少し考えた後、
「デュラン、だ」
家名までは名乗らなかった。
しかしレウスは気にすることなく笑顔で手を差し出した。
「デュランか。よろしく！」
デュランは水晶に乗せていた手を下ろし、ゆっくりと握手をかわした。
「白魔法ってことは、君はやはり……『聖騎士』を？」
「ふん……。見ただろう？　今の反応。微かに真っ白な煙が見えただけ。魔法の才能はからっきしってことさ。そんなんで『聖騎士』なんて……」
「鍛えれば伸びるものだよ。そう簡単に諦めない方が良いと思うな」
「どうだか……」
デュランは寂しそうに笑うと、そっとレウスの手を離した。
「俺は1人で回るよ」
「そうかい？　……お互い頑張ろうね。それじゃ」
「ああ」

デュランと別れたレウスが、ショーマとメリルのもとに戻ってくる。
「駄目だったか」
「うん。……でも想像してたより良い人そうだったよ」
「ふうん」
レウスは彼を気に入ったようだった。少し話しただけだろうに、

そうわかるものなのだろうか。ショーマにはイマイチ疑問だった。
「まあいいわ。早く次、行きましょうよ」
こうしてちょっとした出会いを経て、3人は次の教室へ向かうのだった。

始まりの1日　（3）

メリル・ドラニクス。『竜操術』と名付けられた新しい魔法の体系の開祖、ドラニクス家の長女である。
騎士としての有名を馳せ続けるブロウブ家とはまた別方向の名家で、戦場での活躍に加え、魔法の研究者としても一家言を持ちその資産を伸ばした。
そんな安定した一族と優秀な兄達の庇護のもと、これでもかと甘やかされて育った彼女だが、持ち前の意思の強さで自ら騎士の士官学校への入学を志願したのだった――。

※　※　※

「竜操術とは竜と心を交わし力を借り受けることで、既存の魔法を凌駕する新たな高位魔法技術。ご存じですね？」
「ええ、もちろん」
「そのためにはまず心を通じあわすことの出来る『竜』を見付けることが必要です。例え術そのものを修得したところで竜がいなければ、何の意味もありません」
「私には既に１０年を共にする『友』がおります。それについても問題はありません」
「よろしい。
……この調子ではもう教えることなんて全然無さそうだね」
「そんなこと言われても困るんですけど」

ここは竜操術科目の教室。そして今のが担当教員アウディと注目の新入生メリルのやりとりである。
すでに入学前から、独自に竜操術への修練に励んでいたメリルにとっては、ここで行われる授業で得られる物など正直なところ、少

ないのだ。
「まあ、こちらに注力する必要が無いのなら、同時に別の科目を受けてみるのも良いと思いますよ」
「ええ、最初からそのつもりです」
アウディ教員の薦めに凛と答えるメリル。
「やはり……、騎士を目指されるので？　竜操術以外にも得手があるとなれば、まさに引く手数多でしょう」
「そこまでは考えていませんが、ドラニクスの名に恥じない人間でありたいとは考えています」
「ご立派です」

※

竜操術科目を後にしたショーマ達は、続いて黒魔法科目の教室に向かっていた。
「教員の方がぺこぺこ頭下げて来るなんて、やっぱりすごいんだな」
ショーマはメリルの見えざる実力の片鱗を感じ、素直に感心するばかりであった。
「……貴方ほどじゃないわよ、きっとね」
「俺のとは事情が違うよ」
ショーマの能力は、彼自身が修練の末勝ち得た物ではない。少なくとも記憶の無い今のショーマの物では。
メリルの『今』は、恵まれた環境があったのは確かだろうが、勝ち得たのは彼女自身の努力の結果に違いないのだから。力はあれど、過去の無いショーマにはそれが羨ましくも思える。
「本当に、すごいな。って思うよ」
「……ふん」
誉められると、メリルは怒っているような、照れ臭そうな、複雑な顔をしてそっぽを向いてしまった。

※

黒魔法科目は、今まで回った科目に比べかなり多くの人が集まっていた。

「盛況だな」

「人気あるからね、黒魔法は。戦場で多くの戦果を上げやすいし、後衛だと危険が少ないって考える人も多いらしい」

「なるほどねー」

「最初は混みそうだったから後に回したけど……。どっちにしろ窮屈な思いをしそうだね」

ふとメリルの様子を伺うとなにやら仏頂面になっていた。

「嫌だな……」

「メリルさんは……人混み苦手なのか」

「うん……」

さっきまでは誉められて上機嫌だったようだが、今はダウナーな雰囲気だ。

「しょうがないよ。我慢しよう」

「はあ……」

レウスは笑いながら彼女の肩を叩いて言った。

※

なんとか教室に入ると、教員の案内で空いている座席につくよう指示がされた。込み合っているため3人並ぶことのできる席は無く、ショーマはレウスとメリルからは離れた席に着かされてしまった。

（まあここにいる間だけだし我慢するか……）

せめて目立たないようにしようと思ったが、しかしそうもいかないようだった。

「ねえねえねえ、あなた、噂になってる彼よね」

隣の席にいた女子生徒から声をかけられてしまったためだ。

「何の、ことかな……」
「またまた〜。ブロウブ家とドラニクス家の人間を侍らせてる異国人がいる、ってすっかり話題だよ〜？」
ためしにシラを切ってみようかと思ったが無駄だったようである。
「実はどこかの王子様？　なんて言われてるけど……実際の所、どうなの？」
興味津々で仕方が無いようだ。観念して彼女の方を向く。
女子生徒は先程の口調から想像した通り、快活そうな表情と瞳をしており、胸元まで伸ばした赤みの強い茶髪と、その髪が乗るほど自己主張の激しい胸が目を引く。
（どこ見てるんだ俺は……）
総合的には、メリルとはまた違った印象の美少女と言えた。
「う、うん。実はちょっと、記憶が、無くてね……。彼らには良くしてもらってはいるけど、王子とかでは無いし、侍らせてるとかでも、無くてね。うん」
変な事を意識してしまい、しどろもどろになってしまう。
「記憶、喪失……？　なんだか思いの外やんごとない事情だったのね……」
ぶしつけな物言いだったことを彼女は恥じいているようだった。
「そんな、深刻にならなくても良いよ」
「そう？　ごめんなさいね」
謝られると逆に申し訳無くなってくる。
しかし彼女はすぐに立ち直ると、
「あ、私、セリア。よろしくね！」
また明るい笑顔で自己紹介と共に右手を差し出した。
「ああ。ショーマ・ウォーズカです。こちらこそよろしく」
ショーマも右手を差し出し握手をかわした。見た目の快活さとは裏腹に繊細で儚げな指先のように感じられた。

※

ショーマとは離れた席になってしまったレウスは彼の心配をしていた。隣の席についているメリルはその様子にまたため息をつく。
「いちいち気にしすぎでしょ……」
「そうかも知れないけどさ」
メリルにもその気持ちはわからないでもないのだ。しかし今日は入学初日であり、この教室は人の目も多い。
「確かにあの能力に目をつける誰かがいないとも限らないけど。今はまだ大丈夫でしょう」
ショーマ本人がこの場にいないのを良いことに、メリルは気になっていたことを確認しようとする。もちろん声は潜めて。
……教本さえあればいかなる魔法も修得できるというならば、目をつける輩も遠からず出てくるだろう。その上で記憶喪失であるというなら、何かと御しやすいことだろう。あること無いこと吹聴すれば、信じる根っこを持たない人間は簡単に騙せるものだ。
つまるところ、誘拐してくれと言わんばかりの存在なのだ。ショーマ・ウォーズカは。
特に戦争が終わってまだ3年。敗戦したイーグリス国軍の残党が良からぬことを考えている可能性は高い。
だが、それを見越した上でのブロウブ家だろう。彼らが背後に付き、見習いとはいえ直系の血を引くレウス自身が護衛に付くとあれば賊もそう易々とは手を出せまい。
「……彼、本当のところ何者なの？」
「まだ何もわからないよ。……ただ彼の保護を兄さんに頼んだのは、かのオードラン伯だ」
「……ぇえ？」
あらゆる意味で思いもかけなかった名前に、メリルは眉を寄せる。
「彼の正体は我々の想像以上に大きな物をもたらすかもしれない、って……グローリア兄さんは言っていた」
「貴方の大お兄様が？」

「うん。オードラン伯に会いに行ったのはブレアス兄さんだけど、伯からの話をブレアス兄さんに伝えられて、そう思ったそうだ」
「そうなんだ……。あの人が言うなら本当なのかもね……」
２人の、含むところの多い会話はそこで終わりとなった。
「はー……人多いな……」
後は独り言のみとなった。

※

黒魔法科目担当の教員、インギスが教壇に立った。
「あ、ショーマくん、あれがインギス先生だよ。現役の黒魔導師の８割はあの人の指導を受けたんだって。すごいねー」
「へえ……」
あの後延々喋り続けるセリアの勢いに辟易しつつあったショーマは、教員の登場でやっと黙ってもらえそうだと安堵した。
「本年も積極的な志望者が多くて結構です。しかし」
恰幅の良い体格をしたインギス教員は一旦言葉を区切り、息を吸い直した。
「１ヶ月もすれば半分も残らないでしょう。そして、１年で学科を全て修了出来るのは１０人もいないでしょう。私はそれが実に悲しい。……君達には期待しています。どうか私を悲しませないで欲しい」

（脅しかい……）

「黒魔法とは『破壊』の力です。ただ壊すだけです。黒魔法とはそれしかできない。
……今この国は戦争の『破壊』から立ち直ろうとしている。君達も辛い想いをしたことがあるでしょう。しかし君達は、その力をこれから学ぼうとしています。どういうことかわかるでしょうか」

（残念ながらあんまりわかって無いやつもいます……）
「力の使い方を知る者は、自然と力の抑え方も知るのです。君達ならきっとわかってくれると信じています。
……それでは、明日からの授業でまた会いましょう」

※

「記憶喪失の人間には色々刺さる物のある演説だったね……」
インギス教員の話を聞き、ショーマの笑みは少しひきつっていた。
「あ、そっか……。ショーマくん、戦争の記憶も無いんだ……」
セリアは同情的な視線を向ける。
「でも嫌なことも忘れてるってのは……ちょっと羨ましいかも」
「……君にも、何か嫌な思い出が？」
セリアの明るさからは、とてもそういった物は感じられなかったショーマはなんだか意外に思う。
「お父さんが戦場でね……。命こそは拾ったけど、脚をやられちゃったの」
「そうなんだ……」
「少し移動するだけでも一苦労でね。……もし私が一緒に戦えてたら、きっとお父さんを守ったのにって。無茶苦茶な話だけど、やっぱり気持ちを抑えきれなくてさ」
「その気持ちひとつでここまで来たんだろ？　ならすごいことじゃないか」
「へへ、そうかな。当のお父さんには反対されたんだけどね」
「はは……」
彼女と話しているうちに、教室から人は退出し始めていた。
その人の流れを遡って、レウスがショーマのもとへやってきた。
「おーい、ショーマ。早く出よう。人が多いから入れ替わりで次の

見学希望者が入るみたいだ」
「ああ、そうなんだ」
「あ、あ、あじゃあ私はこれでっ！」
「え、ああ、どっか行く場所でもあるのか？」
そそくさと席を立つセリア。
「うん、まあ、ね。それじゃっ」
レウスはまた一緒に行かないかと誘ってきそうだし、そうなる前に素直に見送ることにした。
「ああ、それじゃあ」
去っていくセリアを二人で見送りながら、レウスが尋ねる。
「……今の子は？」
「ああ、ちょっと仲良くなったんだ」
「へえ……。可愛い子を捕まえるもんだね」
「そういうのじゃ無いって……」
こういう冗談も言うんだな、とショーマは素直にレウスの人物像に1つ要素を追加した。

※

最後に薬師術科目を軽く見学し、志望科目書を提出すると、今日はもうやることが無くなった。
3人は揃って、朝、ショーマとレウスが出会った門の前で別れの言葉を交わす。
「今日はありがとう。君達に出会えて本当に良かったよ。1人じゃ色々と不安も多かっただろうし」
「ああ、こちらこそ。……何なら寮まで付き合おうか？」
「そこまではいいよ……。そういえば、レウスはどこの寮なんだ？」
「僕は寮じゃ無いんだ」
「そうなのか？」
リヨール士官学校の入学生は、基本的に全て寮生活だったはずだ。

「ああ。ブロウブ家の別宅があるんだ。この街にいる間はそこに住むことになってるんだ」
「別宅って……」
「私もね。……一部の名家は寮生活しなくても良いことになってるの」
レウスの説明にメリルが補足をした。
「……やっぱお金の力？」
「そういうのもまあ、無い訳じゃないけど。それなりの地位を持つならそれなりの場所で『保護』される必要があるってことよ」
「僕個人としては寮生活でも良いんだけど、周りが認めてくれないってのもあるね」
「ふうん……」
どうやら名家にも色々と面倒な事情があるようだった。ショーマはあまり深くは気にしないでおくことにした。
「まあいいや。それじゃあ、また明日」
時はすでに夕陽が差し出す頃であった。
「ああ、また明日」
「ごきげんよう」
そしてショーマは2人に背を向けて歩きだした。
「……良いの？」
「彼の寮はカターマさんのところだからね」
「ああ……ちゃんと対策済みってわけ」

※

学生寮といっても1つの建物ではなく、いくつかに別れており、学生達はそれぞれ振り分けられて寮生活を行っている。
レウスの言う『カターマさんのところ』というのもその1つで、リヨール市内に別宅を持たない一部の名家が暮らす、比較的豪華で警備も厳重な寮のひとつだ。学校の敷地に隣接しており、校門から

寮まで警備兵が常に配置されている徹底ぶりだ。
「お疲れ様です」
「ああ、お帰り」
警備兵にもいちいち挨拶をしながらショーマは寮へ向かう。
ホテルのような佇まいのこの『一号宿舎』は名家出身の学生が多いが、あくまで学生のための寮であり、『自分のことは自分で』がモットーである。メイドなどいるわけないし、食事も自分で用意する必要がある。
寮生はまずロビーで番をしている女性、リノンから部屋の鍵を受け取る。外出の際は鍵を預けるのもここのルールだ。
「ただいま戻りました」
「あ、お帰りなさい。ショーマさん。すぐに鍵用意しますね」

リノン・カターマ。寮の総管理者の一人娘である。肩口で切り揃えられたショートカットの茶髪をした、落ち着いた物腰の女性である。今年２０になったばかりだそうだが、見た目のわりに大人びているし、最近美人に磨きがかかってきたと、毎日彼女と顔を会わせる警備兵達も話題にしているらしい。
「メイドはいないがリノンさんがいる」
何の話をしているんだか。

「あ、名前……、もう覚えてくれたんですか」
「ふふ。大事な寮生さんですから。特にショーマさんは印象的な方ですし」
「はは……」
つい髪を押さえてしまう。美人に名前を覚えてもらえるのは気恥ずかしさもあるが、悪くない気分だ。
「……見た目だけじゃないですよ。なんだか、独特の雰囲気を感じます。……はい、どうぞ」
鍵をそっと手渡される。わずかに触れた指に、少しどきどきして

しまう。
（指くらいでなんだよ……）
「そ、それじゃあ」
「はい」
独特の雰囲気……いまいち実感は無かったがそういうことを言われると鼻がむずがゆくなるのだった。

※

広すぎず狭すぎずの部屋には、しっかりとしたベッドに机にランプと、この街に来る際持ってきた手荷物の入った鞄があるくらいだった。
名家のための寮にしては質素が過ぎるかもしれないが、ショーマにはいちいちそんなことを感じる記憶は無かった。
トイレは各フロアで共有とはいえ、個別の風呂場とキッチンがあるのは贅沢な方だろう。
とりあえずは上着を脱いでベッドに横になる。思った以上に疲れがあったようだ。すぐに眠くなってしまう。
（いかん……これは寝る……）
ゆるゆると立ち上がると、部屋に起きっぱなしにしておいた鞄に手を伸ばす。
記憶を失ったショーマが、その時持っていた持ち物の全てだった。彼の身柄に関わるかもしれない物だ。とはいえ、大した物は入っていない。
財布……。いくらかの硬貨や紙幣が入っていたが、このブランジア王国の物ではないし、もちろん近隣国の物でも無い。そしてブランジアのお金は全く入っていない。ショーマが別の国の出身という証ともいえる。

水筒……。この国では見ない透明な薄い素材で作られた物だった。ガラス製ではない。蓋もネジのように回転させて開閉する仕組みであり、この国ではこのような構造の水筒は使われていない。
中の水は紅茶のようである。半分ほど残っているが、成分を解析すれば何かわかるかもしれないと、オードラン老人に言われたので残したままだ。腐らないと良いけど。

耳当て……のような物。今一つ用途がわからない物だ。左右をつなぐバンドからさらに別の糸が垂れているが、どこかに結ぶのだろうか。

鞄の中の物では無いが、今身に付けている眼鏡。それ自体はあまり珍しく無い物だが、レンズの度に対する薄さや軽さなどの精度がかなり高いらしく、高級品であることが予想される。

今着ている服も、この街で買いそろえた物だが、目を覚ました時に着ていた服はやはり見ない素材であったという。

……それから最後に、手のひらに収まるサイズの黒くて四角い板、というか、薄い箱。
あちこちに突起があったり、文字のようなものが書かれているが、記憶に無いためこれが何を意味するかわからない。
何か重要な物だったような気がするのだが、どうにも思い出せない。自分はこれを大切にしていたような気がするのだが。
恐らくショーマの正体を教えてくれる物だという予感があった。
……何なんだろう、これは。

結局分かることは、相当遠くの、知っている人がほとんどいないような国から、たった1人でやって来たのかも知れない、ということ。　そんなこと、有り得るのだろうか。

※

結局今日も何かを思い出すことは無く、そのまま遅い来る睡魔に身を委ねてしまった。

……明日からは本格的に騎士としての修練が始まる。

……今日出会えた人達。レウス、メリル、セリア。教員の先生達。それから、直接会話はしなかった、デュラン。

……彼らとは仲良くやれるだろうか。

……少しずつ、ショーマの新しい生活は動き出していた。

目指すべき道　（1）

――リヨール士官学校の授業が始まりかれこれ3日目。
黒魔法科では待望の、実際に魔法を発動する実践訓練が行われる事となった。2日目までに初級魔法『アイスストーン』と『ファイアボール』の修得が完了した生徒が参加を許されている。
この時点でそれが叶っている学生はまだ少ない。初級魔法とはいえ2、3日程度で修得はできる物では無いのだ。今この訓練に参加しているのは、独自に魔法の教習を受けられるつてを持っており、入学前から魔法に触れていたか、よほど魔法の才能があるか、どちらかだった。
ショーマ、レウス、メリルの3人もそうだった。入学の日に出会ったセリアは、いまだ教室で教本と睨み合っているところだろう。

※

そもそもまず『魔法』とは、程度の差はあれど誰もがその身に持っている『魔導エネルギー』と、空気中に漂う『マナエネルギー』を掛け合わせて産み出す『魔力』で『術式』を組み上げることによる発動する。
発動させたい魔法に必要な魔力を練り上げる工程と、すでに定められている術式を正しく組み上げる工程の2つが必要というわけだ。これらは論理的かつ正確に行えば失敗することは無い。教本にあわせて丁寧にやれば良いだけのことだ。
ショーマの『能力』とは、魔法教本に書かれている『魔力』と『術式』の内容を瞬時に理解し記憶することと、その2工程をまるで機械仕掛けのように正確に実演させることだ。と推測されていた。
特にこの『瞬時に理解する』という点がこの能力の特異点である。

魔法教本とは、ただ紙にインクで文字を書き記しただけの本では無い。記された文字はインクの成分に織り混ぜられた魔力によって、読者の正しい認識を妨害しようとするのだ。だから魔法の心得が無い人間には読むことは出来ても『理解』することが出来ない。

この仕掛けは元々、まだ技術としての魔法が体系化されきっていなかったころ、魔導師達が自分達の研究成果を外部に漏らさないため、錠前のような意味合いで仕込んだものだと言われている。

魔法の存在が一般化したこの時代においては、そういった意味合いは薄れていったが、それゆえ多くの人が触れやすくなったため、安易に危険な力を持たせないよう、この仕掛けは未だ残り続けている。

学生にとっても苦労の果てに得られる達成感として、良いか悪いかはさておき、受け入れられていた。

つまりショーマの能力とは、魔法を学ぶ上で最も手間がかかり、最も重要な過程を飛ばしてしまうということなのだった。

魔導師はえてしてプライドが高いと言われるが、それは初級魔法であろうと常に苦労があり、それを乗り越え続けたからこそ、自身のこれまでに高いプライドを抱くためだ。

だからこそ魔導師としてのショーマ・ウォーズカは、その能力以外の面でも『異端』と呼ばれるようになるのだが。

※

「それでは、始めてください」

「はい！」

ショーマは黒魔法科の実践指導を担当するポリー教員の言葉に頷いた。

……意識を集中し、体の中の魔導エネルギーを呼び起こす。そし

て空気中に感じるマナエネルギーと混ぜ合わせていく。練り上がった魔力は、手にした修行用ワンドの先に込めていく。その作業に淀みは無い。

そのままワンドを振り、虚空に向かい魔法の言葉で文字列を書き込む。術式である。

そして術式に魔力を込めると、その成果が浮かび上がっていく。

大気中の水分と魔力が集まり凝縮し、水の滴が出来上がった。さらに魔力を込め、その水を凝固させると、氷の礫が完成した。

「よろしい。それでは射出してください」

「……はい」

ワンドの向けた先に、氷の礫が浮かんでいる。魔法は発動されたが、行使はされていない状態だ。これを一般的に、魔法の待機状態と呼ぶ。

※

余談だが、このように魔法を使うのにはいちいち時間がかかる。熟練していけば効率良く魔力の練り上げや術式の組み上げは手早くできるようになるものだが、ショーマの能力ではそのための『経験』までは補えない。

だからこそ実戦における魔法使いの戦法とは、この準備時間のラグをどう扱うかが重要になる。

基本的には安全地帯を確保し、このように待機状態で相手の接近を待ち迎撃するというのが一般的だが、威力を削って高速発動を目指す者や、周到に罠を張り、発動までのタイムラグを考慮した上で敵を誘いだし一網打尽にするという者などもいる。

※

「『アイスストーン』！」

掛け声と共に魔力の噴射によって射出された氷の礫が、約１０メートルほど先に置かれた的にめがけて飛んでいく。
「あ」
が、命中せず。
「まあ、魔法自体は問題無く発動できましたので良しとしましょう」
「は、はい」
ポリー教員と一緒に苦笑する。魔法は確かに問題無く使えた。そこはそういう物だと、自分の未知の能力をある意味信頼していたショーマは特に気にしなかった。しかし命中させられるかどうか、使いこなせるかは、自身の技術次第なのだ。
これから先、覚えなくてはならないことはたくさんあることを改めて実感する。

――これが初級魔法、『アイスストーン』である。
気体から固体までの水分の変化は、魔力の凝縮と似ておりイメージがしやすく、出来上がった礫を投擲しぶつけるという単純な攻撃手段は、比較的簡単に修得できるため、最も入門に適した魔法だと言われている。
ただこの魔法は威力が小さく、それこそ小型の弓矢でも撃った方が威力としてはましなものである。実戦においては魔導師の攻撃手段としては下位の評価であり、むしろ近接職の牽制技として補助に使う者の方が多い。

※

バン、と木の板を撃ち抜く乾いた音が響き渡る。
メリルの放った『アイスストーン』が的を貫いた音である。
「これは、お見事」
ポリー教員は思わず手を叩く。
メリルの魔法はショーマのようなたどたどしいものではなく、補

助ワンドに頼らない指先1つでの術式の書き込み、1秒未満での高速発動、そして正確な狙いと木の板を貫く充分な射出速度が合わさった、見事と言う他無い華麗な一撃だった。
「すごいじゃないか」
「ふふ。これくらいどうってことないわよ」
ショーマの賛辞を、メリルは美しい金髪を優雅にかきあげながら受け取った。当然のようでいながらも、どこかまんざらでは無さそうな様子である。
他の生徒からもわずかに歓声は上がっていた。だが誰よりショーマは先程の自分の未熟さを実感したばかりであることから、メリルの凄さは彼ら以上にその身に感じていた。

続いてレウスや他の生徒なども『アイスストーン』の実習を行った。それが済むと次は『ファイアボール』である。

――炎の塊を射出する。という『アイスストーン』に似たタイプの魔法ではあるが、氷の礫という固体ではなく、魔力を燃料に発火を起こし、そのまま炎そのものを射出するという点が大きく異なる。固体では無いため練り上げや射出の難度が上となるが、対象に炎を燃え移らせる事が可能なため、攻撃力もずっと上だ。

しかしショーマにとっては魔力の練り上げも、術式の書き込みも、炎の射出も『アイスストーン』の時とほぼ同じ感覚で行える。初級魔法も上級魔法も彼にとってはどれも等しく正確無比に発動できるため、難易度の差に意味は無いのだ。
（さっき外したのを意識しつつ狙いを付けて……）
ワンドの先に浮かぶ炎の弾。それよりももう少し前方に意識を向ける。
「『ファイアボール』！」

掛け声と共に炎の弾を射出する。今度は見事命中する。
込めた魔力はそう多くなかったため、木製の的には火こそ燃え移らなかったが、若干の焦げ目が残った。
「おお、今度は上手く行ったじゃないか」
様子を見ていたポリー教員は成功を祝った。
「ありがとうございます」
ショーマは喜ぶが、良く考えればショーマとしては『アイスストーン』と同じ調子でやっただけであり、違いと言えば的に当たったか外れたかしか無いことを思い直す。その程度で喜ぶものでは無いだろうと。

続くメリアはさっきと同様に、見事な『ファイアボール』を披露した。
意外だったのはレウスの放った『ファイアボール』は、発動こそしたが、的に命中する前にかき消えてしまった事だった。
「レウスの属性は黄緑。炎系の魔力を練るのが苦手とされる属性なの」
「ああ、属性ってそういう物だったんだ……」
「そう。私は赤と青の2属性を併せ持った紫の属性。炎と氷は得意分野ってこと。……ちなみに貴方は、全部得意なはずよ。すごいわね」
「ど、どうも……」

参加した学生全てが2つの魔法の実習を終えると、正式に修得したことがポリー教員によって認定された。
「さて、これで君達は本当に黒魔法の道への第一歩を踏み出したと言って良いだろう。黒魔法は扱い次第でとても危険な起こしかねないものだ。正しい知識と正しい理念を持ち続けることを忘れないように。……それでは本日は解散！」
「ありがとうございました！」

※

今日の授業は終わり、3人はこの後はどうするか話していた。
「僕は剣術科にも行っておこうと思うんだけど、どうする？」
「俺は……ちょっと黒魔法科に用事が」
「私は帰る」
3人とも意見がバラバラだった。
「はは。それじゃ今日はここでお別れかな」
「そうだな。また明日」
「うん、それじゃあ！」
レウスは早足で剣術科目の訓練場へと向かっていった。
「それじゃあ、俺も」
「ええ……。……頑張ってね」
ショーマはメリルが何か言いたげなように感じたが、自分にも用事があるのでここは深く考えず、黒魔法科の教室へ向かうことにする。
「ああ、また明日」
廊下を曲がって彼の姿が見えなくなるまで、メリルはそこでじっとしていた。

※

教室へ入ったショーマは、セリアの姿を探していた。
「おーい」
セリアの方からこちらに気付いて手を振ってくれた。彼女の隣の席に座る。
「ねえねえ、どうだったどうだった？」
昨日の授業で実践訓練を受けることが決まった時に、終わったら様子を聞かせてくれと頼まれていたのだ。

「うん、まあ……何て言うのかな。普通……？」
「何よそれー」
曖昧な表現をするショーマにセリアは口を尖らせる。
「もっとこう、派手にドカーンとやったとか、無いの？」
「初級魔法を2つ試し撃ちしただけだよ……知ってるだろ？」
「そうだけど。じゃあ、こっそり秘密の魔法教えてもらったとかは？」
「無いよ」
「なんだー」
心底がっかりそうな顔をする。彼女は良く表情が変わるので話をしていて楽しい。
「セリアはどうだい？　教本読み取れそう？」
「んー、まだ1割ぐらい。全然進まないよ……」
「まあ、ゆっくり頑張ってみようよ」
「……何かコツとか無いかなー」
「と、言われてもね……」
一瞬で理解してしまうショーマにとってはコツも何もあったものでは無い。他人の指導に向かないのはこの能力の欠点の1つかもしれない。
「この調子だと初級魔法1つに1ヶ月かかっちゃうよ……」
「ま、まあ読み進めて行けば、自然にコツがつかめてペース上げられるかもしれないし。そこまではかからないんじゃないかな……」
「そうかな……」
「そうだよ……たぶん」
「そこは『たぶん』なんてつけないでおいてよー」
「あ、ああごめんごめん」
上目使いで若干睨むような形で怒られてしまった。声と口許は笑っていたが。
「ふふ。そうだね。……うん。諦めないで頑張ってみるよ」
本当に悪いと思っているかのようなショーマの様子に、セリアは

無邪気な笑みをこぼすのだった。

※

ショーマはその後セリアと別れ帰路に就こうとした。が、その前にふと思い立ち剣術科の様子を見てみようと立ち寄った。

そこではレウスと、例の男子生徒デュランが木製の剣で打ち合いの稽古をしていた。

「ハァッ！」

攻め立てているのはデュランの方だった。迎え撃つレウスは冷静にその攻撃をさばいている。

「まだまだッ！」

デュランは壁にかけられていた剣を取り、左手に構えた。２刀流というやつか。

連激の勢いは増したが、なおもレウスはそれをさばき続けている。

「一撃ごとの重みが無くなっているよ！」

「くッ！」

その言葉に乗ってしまったデュランは、力を乗せて大きく剣を振る。だがそれは手数を活かした戦闘スタイルを殺してしまっていた。振りの大きい一撃は容易く回避され、返り討ちにあう。

「それで大振りになってしまっては意味が無いだろう」

「ぐ……ッ……あ」

脇腹に一撃をもらってしまい、苦しそうにうずくまるデュラン。

その様子にレウスは表情を歪ませる。

「……一休みしないかい？」

「俺から仕掛けたんだ……そう簡単に止めるか……ッ！」

だがデュランは諦めず立ち上がろうとする。

さすがにまずいんじゃないか、と思ったショーマはたまらず声をかける。

「おい、レウス……」

「彼は止めない、と言っているんだよ」
レウスは既にショーマには気が付いていたようで、こちらも見ずに言葉を遮った。
「いや、でもさ……」
「……ッ！」
今度はデュランが言葉を遮った。言葉ではなく、視線で。
（こわ……）
あの形相は聞く耳など持たない。といったところだろうか。
「……い、いやでもさ？」
「ただの稽古だよ。お互いわかってやってるんだ」
「ああ、もう……わかったよ……。ほどほどにしておけよな……」
レウスとはまだ短い付き合いだが、必要以上に痛め付けるような性格では無いと思う。見捨てるようで気が引けるが、ここはレウスの判断に任せて、ショーマはこの場を後にする。

※

帰りの道を行きながら、デュランはなぜあんなにも必死になっているのか、それを気にしていた。2人はつい先日出会ったばかりなのに。その数日でデュランはレウスにああも食い下がるような事情ができたということなのだろうか。

寮に戻ったショーマを、今日もリノンが優しい笑顔で出迎えた。まだほんの数日のことなのに、なんだかこの笑顔が当たり前のように感じられる。リノンはそんな、不思議な暖かさを持っている女性だった。
「お帰りなさい、ショーマさん。今日は魔法の練習をなさったんですってね」
「ただいまリノンさん。知ってるんですか？」
「ええ。さっき戻ってらした方々が話題にしてたんです」

「ああ、そうなんだ」
ショーマはあの後寄り道してたので遅くなったが、すぐに戻ってきた生徒もいたのだろう。
「……魔法、ちゃんと出来そうですか？」
「え？　ええ。大丈夫ですよ……たぶん」
そう尋ねてくるリノンの表情はどこか不安そうだった。
「ショーマさんも、きっと騎士になって……私達を守ってくれるために、戦ってくれるん……ですよね」
（……え）
別に騎士になりたい訳では無かった。誰かを守るために戦いたいとも思っていない。あくまで士官学校で学ぶ理由は、自分の能力で誰かに迷惑をかけたくなかったというだけだ。
けれど、この人にまっすぐ見つめられてそんなことを聞かれては、否定できなかった。
「……頑張ります」
いまひとつ頼りがいの無い台詞だと、我ながら思うショーマであった。
「……ふふ。ありがとう」
そんなショーマにリノンはまた優しい笑みを向けてくれた。
「あ、鍵……。すいません話し込んでしまって」
「い、いえ、そんな……。あ、それじゃ、これで」
鍵を受けとると、つい慌ててその場を立ち去ろうとしてしまう。
そんなショーマの背中にリノンは聞こえるかどうかという声でささやいた。
「私は、ショーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです」

※

部屋に戻ったショーマは、そのままベッドに倒れこんでいた。

（なぜ俺にそんなことを……。あの言い方だと気があるように思ってしまうぞ……。ああいやきっとそう、社交辞令かなんかだろうそうに決まっている変な意味なんて無いしこんなことで浮かれたらみっともないし恥ずかしいああでも）

去り際にかすかに聞こえたリノンの言葉をつい深読みしてしまう。確かに美人で優しそうな人だし、好意を向けられたら意識はしてしまうだろう。もちろん嫌だなんて思わない。

（でもまだ会って数日だし、交わした会話も全然多くないし。いくらなんでもその程度でそんなことあるわけ……）

などと考えていると何故か頭にはメリルとセリア、最近出会った少女達の顔が浮かんでくる。

（なんでだ……）

確かに2人とも方向性は違えどリノンと並ぶ美少女と言える。急に目を引く女性に立て続けに出会ったものだから頭が変になったのだろうか。

（いやいや違う。そもそも記憶を失って以降、人との交流自体がまだ少ないし、特に多かった人物が浮かんでくるだけだ、うん）

そう考えたらオードランのお爺さんやその奥さん。レウスなんかの顔も浮かんでくる。それから……そうだ。そのレウスに突っかかっていた彼、デュランのことも。

思い出すとまた彼のことがまた気になり始めた。あそこまで必死になる理由とはなんなのか。

自分には、何の過去も無いからだろうか。

……過去が無ければ、未来への願望も無い。

記憶は取り戻したいが、それはあって当たり前の物だ。誰だって失えば取り戻したいと思うだろう。それは今考えている物とは違うと思う。

つまり、そう。セリアのように、過去の後悔から未来への願望を抱いたような。多分デュランにもそういう何かがあるのだと思う。そういう物を、ショーマは持てていない。

……だから、他人の願望に興味を持つのかもしれない。自分は持てなくても他人のを知れば、持てた気になるから？

……わからない。

――私は、ショーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです。

それなら。

ショーマ自身の願望。記憶を取り戻すこととは、また別の何か。

それを、探してみようかと思った――。

目指すべき道　（2）

朝。いつもと変わらぬ笑顔でリノンはショーマを見ている。
「おはようございます。今日も頑張ってくださいね」
「おはようございます……。えっと……その」
昨日かけられた言葉が気になってしまう。どう相対したものか。
しかしリノンはまるで変わることの無い様子で、やっぱり自分の考えすぎなのだと思ってしまった。
「あ……鍵です……はい、これ」
結局そんな事務的な会話しか出来なかった。
「はい。お預かりします」
「そ、それじゃ」
「はい。お気をつけて」
かくして、なんとなく逃げるようにショーマは寮を出てしまった。

※

黒魔法科。
今日は実践ではなく、教本を読んでまた新しい魔法を修得する日だ。
黒魔法科の授業内容は、教員の解説を聞きながら、配布されたり室内に蔵書されている教本を、自分で解読しながら読み込み、それぞれ自分のペースで修得していく。出来たと判断したなら教員にその結果を試験してもらい、合格を貰えれば定期的に行われる実践訓練を受けられる。そこで実際にその魔法を発動し、成功できれば正式にその魔法の修得が認定される。
それとは別に戦術、戦略考察を主とした講義もあり、そこでは修練の手を止め、戦場での立ち回りなどが指導される。
最終的に規定以上の魔法を修得し、魔導師としての知識が十分に

あるかを確認する筆記試験をパスすれば、黒魔法科は修了とされる。
ちなみにこの辺りは白魔法科もほぼ同じである。

※

ショーマはまず知り合いの姿を探す。すぐにセリアが見つかったが、どうやら別の生徒と話している様子であった。
どうしたものかと迷っていると、向こうの方から見つけられてしまった。ショーマの気をよそに、早く来いと手を振っている。

「……おはよう」
「おはよっ。……ねえねえねえ、この人がほら例の」
挨拶をすると早々、セリアは一緒にいた女子生徒達にショーマのことを紹介しようとする。
「れ、例の王子様ですね！」
「だから違うって！」
「あ、ごめんごめん。彼が例のショーマ君」
「どうも」
「で、この2人はミモットとコニー」
「ショーマさん……ですよね。私はミモット。セリアちゃんから聞いてます」
「コ、コニーって言います。ど、どうも……へへ」
セリアから紹介された2人は挨拶する。
「ショーマ・ウォーズカです」
倣ってショーマも挨拶を返す。
「昨日あの後色々考えてね、この際集まって一緒に読んでみようか、ってことになったの」
セリアが現在の様子を語る。
「首尾は？」
「まあまあ……ってところ？」

「まあまあか……」
曖昧な表現だった。今日も四苦八苦は続きそうである。

ショーマも一緒になって悪戦苦闘していると、
「おはよう」
いつの間にか隣の席にメリルが座っていた。
「うわ、びっくりした」
セリア達も驚いていたようだ。もっとも彼女らは、かのドラニクス家の人間が、という点に驚いたのだが。
「……随分と仲が良さそうね」
「え、あ、いやこれは……」
どこか不機嫌そうな声音に若干顔がひきつる。何か嫌なことでもあったのだろうか。
「あ、この子達、教本が難しくて悩んでてさ、手伝ってやれないかと」
「ふうん……？」
セリア達に目を向けるメリル。
「あー、あ、あの、その」
つい気圧されるセリア達。
「何かしら？」
言いたいことがあるなら言ってみろとばかりに、メリルは鋭い視線をセリアに突き刺す。間の席にショーマを挟んで。
一方でセリアはいつものはつらつさはどこへやら、思いっきり目が泳いでいる。
（何この状況……）
ミモットとコニーは声も出ないようであった。これではいじめのようではないか。
だが均衡を破ったのはセリアの方であった。
「あああ、あの！　わた私達だけじゃ、あの、これ、魔法教本、その、ちんぷんかんぷんで！」

「……」
「あ、でも全く手がつけられないほどでは無いんですけど、この調子じゃ初級魔法にどれだけ時間かかるか知れたものじゃないなーって、あああのその」
「……それで？」
「おおお、……お力を、ドラニクスさんの、お力を貸して貰え、い、頂けたらなんとか、なるかも知れないかなって！」
「私の力を？　貸してほしい？」
「は、はい！　貸してほしいです！」
「あ、お、お願いします！」
「お願いします！」
物凄くしどろもどろになりながらも、セリアはなんとか力を貸して欲しい。その言葉を口にした。その様子に驚くばかりだったミモットとコニーも、最後には一緒に頭を下げた。
対するメリルは悠然と構え、実に落ち着いた物だった。
さすがに異様さを感じたショーマだったが、メリルにはそうでも無かったようだ。鋭い視線のままセリアの頼みの言葉を、時折誘いながらじっと聞いていた。
しかしてその返答は、

「良いわよ」

えらくあっさりしたものだった。
「え、良いの？」
驚いたのはショーマもであった。
「自分達では手に余るかもしれない、と、ちゃんと認めた上で私に頼ったのでしょう？　ならば責任を持って手を差し出すのが上に立つ物の務めです」
「上って……」
確かにメリルの家は上等な名家らしいが、同じ学生だろうにそこ

まで態度がでかくて良い物かとショーマは思ってしまう。
「あ、ありがとうございます……」
だが当のセリア達は安堵して、すっかりおとなしくなってしまっていた。
「本当は最初の1冊は自分の力で読み取ってほしかったけど、まあ良いわ。
……じゃさっそく始めましょう。まずは文字に込められた魔力の属性を把握することから始めるのが良いわね。『アイスストーン』は教本も含めて初心者向けとして作られているから、使われている属性も分かりやすくただ1つよ。何か分かる？」
さっそくメリルはヒントを与え始めた。
「えっと……なんだろ」
「青、でしょうか」
セリアにはわからなかったようだが、ミモットが答えた。
「そう。正解。自分の属性に近いと分かりやすいと言うけど、慣れればその辺はあまり問題は無いわ。
属性が分かったらそれに対応する方法で、今度は自分の魔力を流し込むの。同じ属性なら文字の魔力を濃くするように、半属性なら割り込んで押し出すように、といった具合ね。ぼんやりとした状態の魔力を感じられやすくするのが目的。やってみて」
「あ、はい！　……んん、ちょっと、難しいですね」
「最初の内はゆっくり丁寧にを心がけると良いわ。何度もやっていくうちに慣れてくるから諦めないで。
……よく言われる、修得に2週間前後かかる。というのはね。この事に気付くまでに1週間。そして後の1週間で全文を読み取るから、と言われてるわ」
「じゃあ私達は……」
「まだ1週間かけて、焦らずじっくり頑張る必要があるわね」
「おお……！」
メリルの指導を受け、セリア達3人は感銘を受けているようだっ

た。1ヶ月かかるかも、なんて弱気だったのを思えば、それも当然だろうか。
「良かった……。正直絶対断られると思ってました……。これで何とかなりそうです」
「貴方達のその姿勢が良かったから、応えたの。調子に乗っちゃだめよ」
「……あ、はい！　ありがとうございます！　もうちょっと頑張ってみますね！」
「『もうちょっと』じゃなくて『最後まで』」
「はい！」

※

「正直俺も意外だったよ」
せっせと教本を読み解いている3人を横目に、ショーマはメリルに話しかける。ひょっとして教えたくてしょうがなかったのでは？
とすら思った。
「上に立つ者の務め、って言ったでしょ」
「そこが良くわからないんだけど」
「ああ……」
メリルはそういえばショーマが一部の常識も忘れていることを思い出した。
「この国では、貴族と平民の差が強いってのは、分かる？」
「平民は本当は士官学校にも入れてもらえないし、寮も分けられるんだろう？」
「そんな程度じゃ無いわよ。もっと過激な考えをする人もいるし。平民を人間扱いすらしないという貴族も珍しく無いわ」
「そんなに……？」
「その辺の考え方はまあいくらか違いがあるけど、少なくとも到底埋められない貧富の差なら、確実にあるわね。

……私は生まれつき何でも持ってる富裕層の側で、貴族も平民も平等であるべき。なんてまったく思わないくらい、身も心も貴族であるつもりだけれど、だからこそ貴族は……、『力』を持っている者は、持っていない者に『責任』を負うべきだと考えるわ」
「『責任』？」
「例えば武力であるとか、権力であるとか。財力等も。使いようによっては人の命くらいなら簡単に左右できてしまう。そういう『力』を正しいことに使うという、『責任』。
と言っても、ただ無闇矢鱈に施しを与えれば良いって訳でも無いわ。
力を持つ『強い者』は力を持たない『弱い者』をただ無条件に守るため、その力を行使すれば良いのではない。それは結局『弱い者』による立場を利用した『強い者』の支配と言う、逆転構造なだけ。
だから、強い者は『力』を真に必要としている者を見極め、必要な分だけを与え、あとはその者自身の『力』に託すの。さっき私が彼女達にしたようにみたいにね。
弱いことを自覚し、強い者に頼る。強い者は力を無闇に振りかざさず、助けを求める声に応える。助けられた者は、結果を果たすことでその恩に報いる。
当たり前のことを認め、真摯に受け止める。それが『責任』という物。強い者と弱い者のそれぞれにとってね」
「……自分じゃどうしても出来ないことには力を貸すけど、出来ることには貸さないってことか。助けてもらった側は、ちゃんとそれを活かして最後まで目標を達成させる」
「かいつまんで言えば、そういうことね」
少し長い話を聞かされてしまったが、メリルの心根にしているものがどこか見えた気がした。
「貴方はどうなの？」
「え？」

「貴方は自分の『力』を責任持って扱える？」

……その問いかけは、何か大事なことを試されている。そう、感じられた。

考える。

メリルの言うことに賛同するならば、力に責任を持つということは、自分の『能力』をただ制御できれば良い。という考えでは間違いだ。『とりあえず誰かに迷惑をかけるようなことが無ければそれで十分』という考えではいけない。もしこの『力』を求める者がいたとしたら、それに応えて初めて『責任』を持ったと言えるだろう。

だが。それはショーマが『強い者』であるならの話だ。

そんなことは無い。力なんて欲しくなかった。誰にも迷惑をかけないようしっかり押さえつけて、静かに暮らすならそれで良いだろう。誰かの助けになんて応えられない。自分は『弱い者』なんだ。

……そう言って否定の意思を表せば、その意見はきっと認められるだろう。

どちらを選んでも、きっと彼女は受け入れる。

ならば、選ぶのは、ショーマがこの『力』をどうしたいか……。

それによる。

それなら……。

「持ちたい。と考えているよ」

選んだのは『強い者になりたい』だった。

「……でも今ははっきり『持っている』とは言えない。今の俺には……自分を支えられる物が無いから。目指すべき物を、見つけられていないから」

それが偽りの無い今の気持ちだ。他人に迷惑をかけたくないという考えは、結局のところ過去の経験から来るものでは無い。あくま

で記憶が無いなりにだが、一般的で常識的な感覚によるものだ。
何より、支えに出来る物を探そうとは、昨日決めたばかりだったのだから。

――私は、ショーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです。

あの言葉に応えたいと、思った。

「そう……」
メリルはそれを聞くとしばし黙考し、
「悪くない答えだと思うわ」

優しく微笑んで、ショーマの意見を認めた。
「……ありがとう」
「……そうね。じゃあ、そう思うならさっさと行動しましょうか」
「え？」
「ちゃんと責任、持てるよう。まずは下級魔法から順に使いこなせるようにしていきましょう」
メリルは椅子から立ち上がる。
今は、授業中だった。

「あー、ところでレウスは……？」
「今は剣術科に行ってるわ。ここに来る前会って話したから。何か気になることがあるみたい」
（デュランのことかな……）
「それよりさっさと覚えるだけ覚えて試験受けて実践しに行くわよ」
メリルは本棚から下級魔法の教本を見繕い積み上げていく。
「俺は覚えることより経験を積みたいんだけど」
「覚える物覚え尽くしたらいくらでも実践させてもらえて経験積め

るんじゃない？　下級魔法なんてそんな扱いに困るものでも無いし、それならさっさと済ませて中級上級に時間をかけるべきよ」
「そ、そういう物かな……」
それにしてもなぜこんな協力的というか、強制的なのだろう。そんなにさっきの問答が気に入ったのだろうか。
「それに貴方の言っていた……不用意に魔法を発動させて迷惑をかけたくない？　って言うのも、正直、志が低いと言えるわね」
「う、わかってるよ……。俺も『責任』、てやつを持ちたいし」
「なら口答えしないでさっさと読みなさい」
「はい……」
初級魔法教本、１３冊が積み上げられていた。

※

「目が疲れる……」
魔法教本を読み解くという行為自体に苦は無いも同然なのだが、１３冊の本を一気に目を通すというのは普通に疲れる行為だった。
――ちゃんとこの後の白魔法科でも下級魔法はさっさと覚えておくのよ。良い？
白魔法科には参加しないメリルは釘だけ刺して、自分は竜操術科の授業に行ってしまった。
白魔法は人の怪我を癒したり、瘴気を祓ったりと、割と分かりやすく人の役に立つ魔法が多い。『責任』を持つならこちらの方が活躍の機会は多いかもしれない。
「やあ、ショーマ。おはよう」
授業が始まるまで教室で待機していると、レウスに声をかけられた。
「ああ、おはよう。剣術科行ってたんだって？」
ショーマも挨拶を返す。
「ああ。昨日は中々良い経験が出来たからね。体を動かしたくて」

「あ、昨日の……結局どうなったんだ？」
攻め立てていたのはデュランだったが、結果自体はほとんどレウスによる一方的なものに見えたが。ていうか、良い経験って……。
「結局彼の方がダウンしてしまったよ。回復魔法もかけておいたし、大丈夫だろう。今日は来てくれなかったけど」
「お前が痛め付けすぎて嫌になったんじゃ……」
「そのくらいでへこたれるような人物じゃないさ。剣を交えればそういうのはわかる」
「そういう物か……？」
楽観的なところがありそうなレウスだ。なんでもかんでも好意的に考えているだけじゃないかとも思ってしまう。
「それより君もなんだかお疲れ気味のようだね」
「ああ、まあ……ちょっと積極的になってみようかと」
「へえ……？　聞かせてくれよ」
「ああ……」

※

それからというもの、時間は矢のように過ぎていった。
やりがい、とでも言うのだろうか。これから進みたいと思えることを見つけたショーマは、駆け抜ける様に日々を過ごしていた。
そして入学から約４週間。ショーマは中級魔法のいくつかまでを修得し、一番最初に覚えてしまった上級魔法、『サンダーストーム』を含めた実践訓練を行うため、士官学校から少し遠出した場所にある、廃材置き広場に来ていた。
ちなみについ先日、無事３つ目の初級魔法を修得し、一緒に参加できそうだと喜んでいたセリアは、ショーマとは別の場所で行うことを知り、とても残念がっていた。
今日の実践は広範囲に効果が及ぶ黒魔法を修得した者のためであり、ショーマを含めて４人のみの参加となっていた。他の参加者は

双子のリシウス・オーディナ、サーナ・オーディナの兄妹と、竜操術科の合同授業として参加しているメリルである。
指導教員は黒魔法科からラーニャ教員と竜操術科からアウディ教員が参加し、さらには大きな魔法を使うため、補助員として騎士団から派遣されたルーシェ・ヴィアンヌが参加していた。
「騎士の人まで来るのか……」
「失礼の無いようにね」
ショーマはメリルと囁きを交わした。

……思えば不意にこの『サンダーストーム』を放ってしまったことが、今ここにいることの始まりだった。
この力を制御する。それが最初の思いだった。今はもっと、『活かす』ことを考えている。

「それではさっそく始めましょうか。まずはショーマ・ウォーズカ君」
「はい」
上級魔法『サンダーストーム』……。暴風を巻き起こし対象を閉じ込め自由を奪い、その中に強烈な雷撃を次々と撃ち込む黒魔法だ。その威力はまさに破壊的。大軍勢を一撃で凪ぎ払うとも言われているほどだ。
ゆっくりと魔力を練り上げる。以前は慌てていて、ほぼ無意識にかつ急速に練り上げてしまっており、精度がかなり雑だったことが今ならわかる。
続けて術式を組み上げる。こちらはそう形が崩れたりもしない。落ち着いて確実に行う。
「うん。出来ましたね。では一発派手にやっちゃっていいですよ」
正直なところまだ怖いという気持ちはある。あの時の失敗。死傷者こそ出なかったものの、ずいぶんと背筋が冷える思いをした。学校の授業が始まってもすぐには積極的になれなかったのもそのせい

だ。
でも今は、違う。
「『サンダー……ストーム』！！」
目標と見定めていた廃材の一角を中心に、風が巻き起こる。一瞬にして砂と廃材を巻き上げ、暴風へと成長する。そして激しい雷鳴が数秒間に渡って鳴り響く。
やがて風がかき消えると、その場はまさに焦土。雷撃を受けいくつかの廃材には火が燃え移っていた。
「はい。良く出来ました。もうちょっと強く魔力を込めても良かったですかね」
「あ、はい。ありがとうございます」
「はい、では次はオーディナ兄妹方。……今日は人数が少ないのでたくさん練習出来ると思いますよ」
ショーマの様子に、満足がいっていないことを見抜いたラーニャ教員は助言をする。ショーマとしても、今日はそういう期待をしていた。
「まあ、これからって感じかしらね」
そっけない感じでメリルはショーマの『サンダーストーム』を評価した。
「そうだね。これからだ」
ショーマは軽い言葉でも真摯に受け止める。
その様子にメリルは意外そうな顔をしたが、すぐに少しだけ不機嫌そうな顔になり口を尖らせた。
「……ふんだ」
その様子にショーマは笑みをこぼす。
「ほら、そろそろメリルも準備しなよ」
「わかってるわよ」
いつのまにかさん付けやめてるし……。

ひっそりと誰にも聞こえないよう、セリアはひとりごちた。

※

若い騎士候補生達を見つめる騎士ルーシェには狙いがあった。
既に抜きん出た才を持つ者を見極める。それこそ将軍級の器の持ち主。はたまたもっと大きな、国を動かしていくことになるであろう、未来の力を探し出す。
騎士団大隊長の1人、ブレアス・ブロウブの命であった。
――せっかくだ。そろそろ戦を経験させて良いと思える者を見繕ってきてくれ。
……まだ学び始めて1ヶ月弱。さすがに時期尚早すぎるとルーシェは考える。だが、将軍級ともなりうる者ならば、たかが中隊長の自分の考えよりずっと上を行くのかもしれない。いや、そうでなくては困るのか。
……慎重に見定める必要がある。ルーシェはまずはこの4人の若者達をくまなく見定めることとした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8617z/

ブランジア人魔戦記

2011年12月28日01時53分発行